

第二章 タゴールと岡倉天心



「現代のルネツサンス人」タゴール

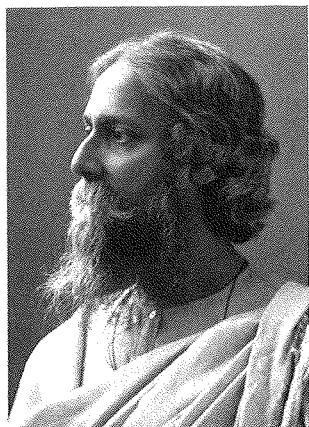
タゴールは、単なる詩人というにはとどまらない偉大かつ多彩な天才だった。彼はその八〇年間におよぶ人生のうちに、音楽、小説、児童文学、音楽劇、芸術、教育、精神、政治、哲学、自然、宗教、人権、東洋思想、農民経済、古代インド世界史、国際交流、学校設立などさまざまな分野の知識をもち、それぞれの分野に深くて幅広い重要な貢献を果たしている。まさに、「現代のルネツサンス人」というべき万能の天才であつた。特に、タゴールは一五〇〇曲にもおよぶ「タゴール・ソング」を作つた。それは今も人々に愛されており、インドとバングラデシュの国歌にもタゴールの歌が選ばれた。

私はベンガル人としてタゴールのことを心から誇りに思うとともに、あれほどの智識と深い思想をもつた人は、彼以後はほとんどないと確信している。その思想と活動は世界的な広がりをもち、單にインドやアジアにとどまらない普遍的な価値がある。だからこそ、我々ベンガル人はもちろん、全インド大陸でもタゴールのことを、グルデボ（教育面においては神に等しい存在）であり、コビグル（詩人の中の詩人であり）、さらに、ビッショ

コビ（世界一の詩人）であるという、最も深い尊敬の言葉で呼んでいる。

タゴールは一八六一年、イギリス統治下の西ベンガル・カルカッタに生まれ、大東亜戦争開戦直後の一九四一年にこの世を去つた。

タゴール家は代々イギリスとの貿易をはじめとしたさまざまなビジネスで成功を収めた富裕な家族で、祖父の代からインドの近代的改革にも熱心に取り組んでいた。タゴールの家には、ベンガルの詩人、音楽家、文学者、画家、宗教家などが多数招かれ、さまざまな音楽会やお芝居、詩の朗読会などが開かれていた。タゴールの兄弟姉妹や親族もまた、文学、音楽、絵画などの豊かな才能で活躍した人が数多い。



ロビンドロナト・タゴール

タゴールは恵まれた環境に育ち、近代的な学問とインドの伝統的な教育の両方を学んで育つた。イギリスの首都ロンドンでも学び、東洋と西洋の文明の違いと、そのメリット・デメリットは彼の思

想の普遍性につながった。

一八九〇年以後は、父親の依頼により、東ベンガルにある家族所有の土地や財産の管理を任せられた。バングラデシュの豊かな自然、特に、雄大な大河とその水平線から昇り沈んでゆく太陽の美しさに、タゴールは本で学ぶ知識以上の大きな影響を受けたにちがいない。バングラデシュが詩人や音楽家、映像作家などを多く生み出しているのは、この自然の美しさによる。タゴールは東ベンガルの美しさを次のように語っている。

〔前略〕地上は何と不思議なほど美しいことか、また、なんと広大な生命と深い想いに満ちているかは、ここにきてみなければ、思い浮かびません。夕方、私は小舟に黙つて坐つていると、水が静まり返り、岸辺がかすかになり、空の果る夕陽の輝きが次第に薄れていくとき、物も言わず、眼も半ば閉じた自然は、私の身体と心全体に、おおらかに、広やかに、そつとふれていたのを感じました。何という平安、何という愛情、何という大きさ、なんという限りない憐れみに満ちた悲しみ。この人里のからし島からあの人なき星の世界に至る空間のすみずみまで、無数の驚嘆した心に満ちて

いました。私はそこに、果てしない心の世界に一人坐つていました。（後略）

〔つれづれの手紙〕一八九一年一〇月一日付

我妻和男著『タゴール』講談社

タゴールは一九〇一年、西ベンガルのシャンティニケタンという、当時はほとんど草木も生えていない荒野に学校を設立する。当初は経済面を含めさまざまな問題を抱え込みながら、不毛の土地を自ら開墾し、植樹を行つた。このとき、タゴールの妻は苦労がたたつて亡くなつているほどである。この学校設立は、理想の教育を行いたいというタゴールの意志の表れで、特に子供たちには、自然と触れ合い、大地に根差した教育をしなければならないという信念からきていた。この学校が後にタゴール国際大学として発展する。後述するが、タゴールはシャンティニケタンの彼の学校に、一九〇二年に岡倉天心とともにインドを訪れた堀至徳、一九〇五年以後は日本美術院の勝田蕉琴、柔道家の佐野甚之助などを迎えている。

ベンガル・ルネッサンスに与えた天心の影響

タゴールも、当時のベンガルの知識人も、イギリスの植民地統治下で否定されていた自分たちの伝統・文化復興を目指す「ベンガル・ルネッサンス」という運動を起こしていた。一九世紀末ごろから、タゴールの親族で画家のオボニンドロナト・タゴール、画家ゴゴネンドロナト・タゴール、画家ノンド・ラル・ボシュ、画家オシト・クマル・ハルダルなどが、インドの土着的なヒンドゥー美術や、インド民衆をテーマに、新しい絵画を生み出そうとしていたが、ここに天心が与えた影響は限りなく重要である。一九〇三年、天心は横山大観と菱田春草を、日印美術交流のために派遣している。その他にも、勝田蕉琴、荒井寛方などが訪印し、ベンガルの画家たちと影響を与えあっている。特に横山大観は、聖なるガンジス河の風景、そのほどりで暮らす人々の姿、ヒンドゥー文化などをテーマに素晴らしい作品を残しており、日本の大切な文化財となっている。

タゴールは画家だけではなく、柔道、華道、茶道、日本画、木造技術、庭園など、さまざまな分野での才能ある人々を日本からインドに招請し、岡倉天心もまた深く協力している。

タゴール学校の最初の外国人生徒は、岡倉天心とともに訪印した堀至徳であった。彼はそのままインドに留まり、残念ながら若くしてインドで病死したが、岡倉天心とタゴールの結びつきの深さを象徴する出来事だった。そして、タゴールはこのとき、インド人の心身鍛錬のため、柔術の指導者を送ってくれないかと天心に依頼し、一九〇五年には慶應大学の佐野甚之助が訪印、タゴール学校で三年間柔術と日本語の教師を務めた。余談になるが、一九九八年にノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センの母親（オミタ・セン）も、この佐野甚之助の指導を受けている。タゴールは、女性の護身術としても柔術を重視していた。

岡倉天心は最初のインド訪問から日本に帰国してすぐ、東京大学で基調報告会を開き、インドおよびタゴールとの出会いについて語っているが、その場には、同大学の学長を含む約七〇人のさまざまな分野の教授や知識人が出席した。このことからも、日本とインドの最初の文化的、また政治的な交流・連携が実現したのは、岡倉天心の偉大な業績というべきだろう。

を恐れて、イギリス総督が何の事前通告もなく、ベンガル分割という強引な政策を行つたことである。これは、現在のインド西ベンガル州、バングラデシュのほかにオリッサ州、ビハール州、アッサム州を合わせて「ベンガル管区」として定められていたのを、二つに分割統治する政策であつた。これは明らかに弾圧と管理を強めようとするもので、当時のベンガルでは何百万人の人々が反対運動に立ちあがつた。

タゴールもこの運動に参加したが、分割反対運動においてリーダーの一人として行動したのが、オーロビンド・ゴーシュという活動家であった。この反対運動は一九一年に「ベンガル管区」が撤回されるまで続いた。ゴーシュはこの当時は、イギリスと闘うためならば手段を選ばないといふ過激派だったが、投獄され、後には新しいヨーガ運動に転じた。このゴーシュも一九〇二年に天心と会っている。

私は、インドの独立運動に火をつけたのは岡倉天心だと考えている。『東洋の理想』は英語で出版されたため、ベンガルの若い知識人たちはこの本を読んで多大なる影響を受けた。天心の二度にわたるインド訪問が、文化・思想面、そして政治面など多岐にわたって、その後のインド独立の志士に影響を与えたことが、いくつかの資料や証言で確認されている。

一九一二年の訪問は、最初にインドを訪れたときからインドがどのように変わっているかを、天心自身の目で確認するためにインドを再び訪れたのだと私は考える。すでにこのとき、天心の体調は思わしくなく、タゴールのノーベル賞受賞も知ることなく、翌年の九月に天心はこの世を去つた。最初の訪印から一〇年後のインドについて、天心がどのように感じたかについては記録が残されていない。

しかし、印象的な出来事として、天心はカルカッタでベンガルの女流詩人、作家、社会運動家であるプリヤンボダ・デーヴィ・バナルジー女史に出会つた。彼女はタゴールの親戚に当たるが、二人はプラトニックな恋に落ち、天心の帰国後も手紙が交換された。当時インドでは、女性が社会に出て活躍することは、ヒンドゥー教徒であれムスリムであれ、ほとんど許されていなかつた。だがタゴールは何の偏見ももたず、プリヤンボダ女史に雑誌の編集などをさせ、また彼女も私財をタゴールの学校運営に寄付するなどの協力関係にあつた。

こうしたタゴールの人間関係を通じて、天心はこの素晴らしい女性に出会つた。二人の手紙は今も日本とインドにそれぞれ残されている。

タゴールのノーベル文学賞受賞と『ギータンジャリ』

それまでもタゴールは多数の詩集を発表していたが、一九二三年、アジア人としては初めて、イギリスの植民地インドのベンガル人として、ノーベル文学賞を受賞した。当時、西欧の白人文明が最も優秀なものとされていた時代に、アジア人がこの賞を受賞したことには、世界に大きな衝撃を与えた出来事だつた。受賞対象となつたのは、タゴールがベンガル語で書いた詩集『ギータンジャリ』である。

この詩集に収められた詩には、すべて、タゴールが作曲した音楽がつけられており、今もインドで愛唱されている。このとき、タゴールは五二歳だつた。『ギータンジャリ』のなかでも有名なこの詩を紹介したい。

ああ 私の心よ！ 幸^{さち}う聖なる岸辺で
静かに 目覚めよ——

この インドの 人類の

海の岸辺に
ここに立ち 両手を広げ
人なる神を 私は拝む
私は 寛容な調べにあわせ この上もない歓びにみちて
この神を 敬う
深く瞑想に耽る この山々！
川なる数珠を持つた 大平原！
ここに見よ とこしえに 清らかな
大地を！
このインドの 人類の
海の岸辺を！

せきとめがたい 大流となつて
どこから来て 海の中へ消えたのか

誰も知らない

ここには アーリヤ人 ここには 非アーリヤ人

ここでは ドラヴィダ人 中国人――

サカ族 フン族の群 パターン人に蒙古人が、

一つの体に 溶け合つた

(中略)

このインドの地に、昔
大きな呻^{フリト}の声が 休むことなく
一なるものの のり言^{ハトハ}として 心の絃に
じよめき 韶^{ハトハ}いた

人々は 苦行の力で 一なるものの 炎の中に、
多を犠牲として捧げ 差異を忘れ
一つの大いなる心を 喚び起した

(中略)

私の心よ 苦しみを担え
一なるものの 呼声をかけ

あらゆる恥と恐れに 打ち克て

侮りは 遠ざかれ！

耐え難い苦しみは終りになり

この上ない 大いなる生命が 誕生するだろう。

夜が終りになり 母は目覚めた

大いなる巣のなかで

このインドの人類の

海の岸辺に。

来たれ アーリヤ人よ 来たれ 非アーリヤ人よ
ヒンドゥー教徒よ イスラム教徒よ！

来たれ 来たれ 今は英國人よ！

来たれ 来たれ キリスト教徒よ！

来たれ バラモンよ！ 心を清くして

すべての人の手を取れ

来たれ 虐げられた人よ！

すべての侮辱のかせは とりはずされよ！

母の祭りに 急ぎ来たれ

すべての人に触れられ 淨められた

岸辺の水で

吉祥の水瓶が まだ満たされてないのだ。

今 インドの人類の 海の岸辺に！

我妻和男著 『タゴール』 講談社

タゴールのノーベル文学賞受賞は、日本にも大きな衝撃を与えた。単に知識人や芸術家ののみならず、一般の人々の中にもタゴールへの関心が広がり、詩人に会いたい、その言葉を聞きたいという声が高まつた。日本政府もこの声に応え、タゴール来日の実現に向けて働きかけるが、政治的な理由からすぐには実現しなかつた。

当時は日英同盟が締結されていたが、イギリスにとつて危険人物ともいえるタゴールが、しかも岡倉天心をはじめアジア主義の知識人や運動家が多く活動している日本への渡航許可が簡単に下りるはずはなかつた。

しかし、タゴールの詩は英語版を通じて日本語に翻訳され、ほかの著作も次々と紹介されていった。なぜこれほどの反響があつたかのかといえば、もしアジアからノーベル受賞者が出るとすれば、それはアジアでただ一つの先進国である日本の文学者か科学者である

うというのだが、当時の国際的な常識だったのである。それが、世界ではほとんど無名の、しかもイギリス植民地統治下のインド人が受賞したということの驚きが大きかったのだろう。

タゴール来日と新たな日印関係の始まり

そして、とうとう一九一六年、タゴールの訪日が実現した。一九〇三年に結成された日本協会の当時の会長渋沢栄一が招待状を送った。渋沢はその後もタゴールが訪日するたびに詩人を訪れており、彼のタゴールへの尊敬がうかがえる。タゴールは五月末から九月末まで約三ヶ月、横浜の実業家・原富太郎の三溪園に滞在し、日本女子大学の創設者である成瀬仁蔵の招きにより軽井沢で生徒たちと交流した。また茨城県五浦にて、岡倉天心の遺族と会うとともに、天心の建てた六角堂に赴き、記念の書を残している。画家の横山大観、詩人の野口米次郎、東大教授であり武藏野大学創立者の高橋順次郎、仏教学者であり僧侶の河口慧海、柔道家の佐野甚之助、仏教学者の木村日紀らによって、上野寛永寺で大歓迎

会が開かれ、首相の大隈重信、東大の学長を含む約三〇〇人の著名人が参加した。このようないい歓迎ぶりは日本近代史上はじめてのことだった。

ここで述べたいのは、日本においてタゴールを論じるときに、この来日時、タゴールが日本のナショナリズムや軍事政策を批判したことの大さくとらえる傾向があるということだ。しかし、タゴールの日本批判の多くは、彼の「国家主義」批判に象徴されるように、日本が近代化のなかで、過去の歴史伝統を見失い、西欧近代主義、帝国主義を真似ているという点である。その最もわかりやすい主張は、一九一六年、訪日後アメリカで講演した「西洋における国家主義」「日本における国家主義」「インドにおける国家主義」という連続講演だ。以下はそのなかの「日本における国家主義」で述べられた一節である。

「日本にとつて危険なのは、西洋の外的特徴の模倣ではなく、西洋国家主義の原動力を自分自身の原動力として受け入れることである。日本の社会的理想は、すでに政治の手に敗北した兆候を示している。私は日本現代史の入口に大きく『適者生存』という標語が科学から借用して書かれているのを見る。その標語の意味は『自分自身を助

けよ、それによつて他人が犠牲になつてゐる内容など気にするな』（『国家主義』）

「あなたがたの国に、あなたがたの父祖伝來の理想に同感しない人々が確かにいると私は思つてゐる。またそれらの人々の目的は成長することではなく、獲得することである。彼らは、自分たちが、日本を近代化したと、大声で自慢してゐる」（『国家主義』）

我妻和男著『タゴール』講談社

タゴールにとつての西洋国家主義とは、征服と闘争、人間の機械化を特質としていると考えることであり、その傾向が日本にも及んでいることを批判したものである。この批判はタゴールと同じベンガル人である私からみても、あまりに厳しすぎる面がある。

日本が幕末から明治維新を経て、この講演が行われた二〇世紀の前半にいたるまで、世界は帝国主義とそれに対抗する闘いが起り、各国が独立を守るために、近代化によって軍事、産業、國家権力の拡大を目指すしか選択肢のない時代だった。日本もそれ以外に道はなく、しかも資源のない日本は、海外に勢力を拡大すること以外に自国の基盤を守る

ことはできなかつた。

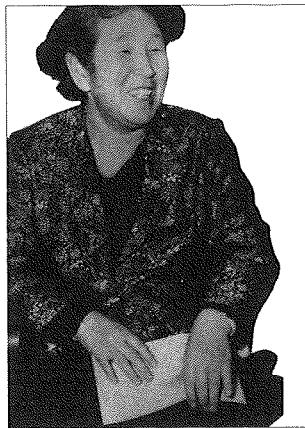
日清戦争、日露戦争の勝利が、アジアにおける清の霸權、欧米の植民地体制から各民族を解放し、近代化への道を開く意義のある戦争だつたことは確かだ。この点において、タゴールの近代批判、日本批判が、当時の日本知識人から、理想主義的すぎるとして反発を招いたのはやむを得ないだろう。

岡倉天心も明治の日本に対し、歐米崇拜の傾向や伝統を否定する面を厳しく批判したように、日本が近代化のなかで自国の良い面を見失つているのではないかというタゴールの警告は、日本に対する貴重な提言としてとらえればよい。

一九〇七年、タゴールは東ベンガルの港町チッタゴンにおける集会で、日露戦争で白人に勝利した日本を例にあげて、インドの若者に、眠りから覚めるよう呼びかけてもいる。恐らくは日韓併合を受けて日本に対する意識が変わつたのかもしれない。

日本にとつては朝鮮半島が防衛の要であること、またロシアの南下を恐れてのことであるが、それを列強の植民地支配と同等に考えることはできないと私は考える。

しかしタゴールは日本の美点については、常に変わらぬ高い評価をしていることも忘れ



高良とみ（和田とみ子）

タゴールは第一回訪日の後、アメリカに渡った。翌一九一七年二月、アメリカからの帰路に再び日本を訪れている。第三回目の訪日は一九二四年六月、第四回目は一九二九年三月、その後アメリカ、カナダに行く予定だったが、トラブルにより再び日本に戻り、五月から六月にかけて滞在した。

タゴールと日本の交流のなかで忘れてはならないことは、日本女子大学の生徒、和田とみ子との出会いである。彼女はタゴールの通訳、翻訳を行いつつ、自身が亡くなるまで、タゴールの思想を

ではない。

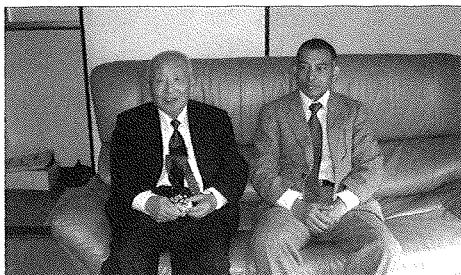
「日本人は美の王国全体を手に入れた。日本人は、目に触れる物すべてに対して心細やかな思い遣りがあり、少しも疎かにすることがない。……他の国では、才能豊かな人や眞のユーモアを解する人々の間にみられる美意識が、この国では全国民の間に広がっている」（『日本への旅人』）

「（前略）日本人は、自分の家のうちに、そこに、いたるところに、美に対して、自分の礼拝の捧げ物を捧げている。……美に対して、これほどの心を込めた尊敬は、他のどこでも見たことがない。これほど周到に、これほど大切に、純粹さを護つて美に接して行く術を学んだ民族は、他にどこにもない」（『人格論』）

「（前略）何世紀にもわたる習慣によつて、どんな仕事でも、どうにかこうにか、まあまことにやつてしまふなどということは、日本人はしない。かれらは、心を集中し切つ

て、美的に仕事を行う。見て、ただただ思えることは、かれらが、仕事のてだすべてにおいて、終始、心を確立することを学び取つてゐることである。このことこそが行為における禅定である」（『禅定的日本』）

我妻和男著『タゴール』講談社



著者と男教授和妻我

深い知識と敬意をもって研究し、日本でタゴールへの認識を広げるため大きな役割を果たした。結婚後は高良とみの名前で、日本やアメリカでタゴールと親しく交流し、一九三五年、インドで晩年のタゴールに会つたことを自伝に書き記している。そのときタゴールは、日本のさまざまな思い出を懐かしく語り、また再び日本を訪れ、軽井沢で詩作ができたらどんなにいいだろうと周囲の人々に語っていたという。一九八一年、高良とみ氏は有志とともに、タゴールのゆかりの地である長野県軽井沢にタゴール像を建設した。その銅像には「人類不戦」の文字が彫られている。

タゴールが日本に遺したもの

一九四一年、第二次世界大戦の直前に、タゴールは八〇歳で世を去った。しかし、彼と岡倉天心が築きあげた日本とインドとの絆は消えることはなかつた。一九五七年に平凡社の創業者・下中弥三郎の呼びかけで、一九六一年にタゴール生誕一〇〇周年記念祭を日本で開催することが決まる。多くの知識人が続々と参加してきた。かつてタゴールを迎えた

た実業家・大倉邦彦も参加し、彼が会長として主導し、準備が進められた。当時の文化、文学、教育、宗教、財界などの主要人物が「タゴール記念会」を発足し、さまざまな式典、セミナー、映画上映、音楽、舞台、タゴールの絵画展示会、ベンガル語講座、タゴール研究室などを計画した。またタゴールに関する膨大な資料が収集され、記念出版物が発行された。

その後も、奈良毅、我妻和男、我妻綱子、白田正幸、大西正幸、鈴木喜久子、西岡直樹、丹羽京子、渡辺一弘などの学者、研究者によりタゴールやインド、ベンガルの文学研究、思想研究が進んだ。

そのなかでもタゴール研究の第一人者は、これまでも本書でたびたび著書を引用した東京大学出身で元筑波大学名誉教授の我妻和男であろう。彼は東大で渡辺照宏教授にベンガル語を学んだのち、一九六七年にインドのベンガル州にあるタゴール国際大学客員教授になり、三年半日本語と日本の文化を教えなが

ら、タゴール文学を深く研究し、体系的な翻訳を行った。帰国後、一九七一年に「印日タゴール協会」が結成され、我妻教授のインドにおける幅広い人脈から優秀な知識人らを招請して、セミナーやシンポジウムを行つた。

この協会の最大の成果は、中村元、高良とみなどが参加協力したタゴール全集の日本語版出版であろう。また、我妻教授は一九九四年にはシャンティニケタンのタゴール国際大学に「日本学院」を建設した。さらに二〇〇七年にはカルカッタに「印日文化センター・ロビンドロ・岡倉館」を西ベンガル政府と共に設立した。その長年の苦労と貢献が認められ、インドの西ベンガル政府からタゴール賞、タゴール国際大学からは名誉タイトル「デシコットム（国民至高者賞）」が贈られた。二〇〇八年には日本政府より瑞宝中綬章を受章した。我妻教授は二〇二一年にこの世を去つたが、彼の業績は日本とインド、バングラデシュの歴史に永遠に残ることであろう。

最後に、一九二四年の来日時にタゴールが講演会で、岡倉天心がインドに与えた影響と、その偉大な思想について語つた部分を引用して終わりとしたい。

〔前略〕私は日本から来た一人の偉大な独創的人物に接した時に、眞の日本に出会いました。この人は長いあいだ私共の客となり、そのころのベンガルの若い世代にはかり知れない靈感を与えました。

〔中略〕彼が私どものなかで私どもと共に過ごした日々は、青年たちにとって、歓喜と熱情にあふれた、すばらしい日々でした。熱烈な愛をもつて、彼は当時の青年たちと一緒になり、青年たちは今も彼をおぼえています。彼が原動力を与えた運動は、今も私どもの地方で進んでいます……」

「ベンガルにおける、精神のめざめをみちびいた影響の一つは、まさにあの偉大な人格、岡倉天心の心から発したものであることを、私は今日、この会合の席で、よろこんで告白したいと思います」（一九二四年、タゴール来日時の講演より・高良とみ訳）

原嘉陽編著『インド独立の志士と日本人』展転社